

## 「国連大学 SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP)」第 24 回ワークショップ開催

2023 年 5 月 24 日、SDG 大学連携プラットフォーム (SDG-UP) の第 24 回ワークショップがオンラインで開催され、参加大学 21 校から約 40 名が出席しました。今回は海外大学の取組みとして、ペンシルベニア大学よりメリッサ・ゴッダールシニアディレクターをお招きしました。

ゴッダールシニアディレクターは、同大学に新設された環境イノベーションイニシアティブの初代シニアディレクターとして、世界の重大な環境問題の解決策を提示するためのプログラムを主導しています。地球環境政策に携わる専門家として「Global Priorities, Local Action: Using the SDGs to foster collective research and education」をテーマに、地球規模の課題に関するローカルなアクションやペンシルバニア大学の取組みについて紹介しました。

まずゴッダールシニアディレクターは高等教育の役割として、利益に基づいた成功ではなく、知識を創造し広め、言論の自由を担保する環境で教育研究を実施し、次世代を担うリーダーを育てることの重要性を強調しました。ペンシルバニア大学はフィラデルフィアの中心部の広大な都市型キャンパスに 12 のスクールを持ち、10,400 人の学部生と 13,000 人の大学院生が通う、アメリカで最も古い大学の一つです。大学として奉仕的な役割を果たすことに注力しており、学生、教員および職員が地域社会に貢献し、世界に還元できるような取組みを実施していることにも触れました。

ペンシルバニア大学は、喫緊のグローバルな環境課題に対するソリューションを導き出すというミッションのもと、以下の 3 つの優先事項を提唱しています。

1. 「自然のステュワードシップ (自然保護)」: 自然を保全・管理し、評価する
2. 「気候変動対策」: 気候変動を緩和しつつ、人が適応していける方法を考える
3. 「社会的なレジリエンス (回復力)」: 社会における弱者が環境汚染の被害者にもなりやすい状況を改善し、誰もが公正に安全な環境で暮らせる状況を保障する

また、同大学がこれらの取組みを通して目指す具体的なゴールとして、以下 4 点を紹介しました。1) 大学の影響力を地域社会において高め、ステークホルダーとの効果的な連携を築く、2) 学際的な研究を促進する、3) 社会変革を目指した教育を提供する、4) 地域コミュニティとの積極的な協働を実施する。

環境イノベーションイニシアティブ活動の一環である「リサーチコミュニティ」というプログラムは、前述の3点の優先事項に沿って、環境的意義を持つ共通のテーマの研究に取り組む学際的なグループを構成するもので、優れたコミュニティ活動には賞を授与しています。2023年の事例としては、工学部と獣医学部が連携し再生農業に取り組む研究を行うプロジェクトや、獣医学部と医学部が主導するワンヘルスという概念に基づいたカリキュラムのもと、芸術科学部、看護学部およびコミュニケーション学部が連携し、地域の学校における気候変動がもたらす人へのストレスを解明するための調査などが紹介されました。同イニシアティブは気候変動対策に関する活動にも力を入れており、昨年のCOP27では同大学の全スクールが気候変動に取り組むことを発表しました。また、学生の理解度を把握することを目的に、2年ごとに気候リテラシー評価を行なっています。

ペンシルバニア大学同センターでは、SDGsを有効活用するために22からなるセンター、機関および研究所の活動を分析し、SDGsに関わる取り組みや協働プロジェクトへの資金投入に関する調査結果についており、その結果を本ワークショップにて共有しました。本調査からは、目標11「住み続けられるまちづくりを」、目標13「気候変動対策に具体的な対策を」、目標3「すべての人に健康と福祉を」、目標8「働きがいも経済成長も」などの項目が高い数値を得たことが確認されたことを紹介しました。

また、ペンシル大学における5,000人の教員を対象にしたデータベースを活用した調査も実施しており、結果として2018年から2023年の間に1,000人以上の教員がSDGsに関連した論文を1,750本以上発表していることも報告しました。近年5年間に気候変動に関する論文を発表した教員の情報は、図書館システムの「ディメンション」というデータベースで確認することが可能であり、SDGs13気候変動に関連する教育や研究についてもその内容、学部、教員別の情報を得ることができます。

ペンシルバニア大学環境イノベーション・イニシアティブでは、「SDGsを超えるもの (Beyond SDGs)」について議論を進めています。例えば、アジェンダ2030で取り上げられていない農業、鉱業、汚染および環境正義などのトピックに関連するキーワードをアジェンダに追加する必要性を強調しています。さらには、テクノロジー、金融、ガバナンスおよび環境倫理など、ソリューション志向のキーワードにも言及する必要性も検討しています。これらは、生物多様性や気候変動などの課題解決策にも深く関連し、未来に向けた世界的な議論に共通するテーマです。2024年には「未来サミット (Summit of the Future)」が開催され、各国首脳が「未来のための協定」を承認し世界的な連帯を示すことが期待されています。

SDG-UP のチェアである国連大学サステナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) 山口しのぶ所長がモデレーターとして、ゴッダールシニアディレクターへの質疑応答を行い、ペンシルベニア大学が実施する具体的な事業における課題や目指す方向性に関する様々な質問が寄せられました。ゴッダールシニアディレクターの返答は以下の通りです：

1. ペンシルバニア大学では、環境に関する政策が未だに充実していないのが現状です。これからの 5 年間で全ての研究分野を気候変動と連携させることを目指し、教職員と直接話をする努力を続けていくと話しました。
2. 大学独自のプロジェクトである「リサーチコミュニティ」事業の評価に関しては、現在の審査構成員である、自然科学、社会科学および人文科学からの教員に加え、今後は多様性を重視した評価委員会とする方針です。
3. 学部のカリキュラムに関しては、今後持続可能な社会に関するより深い内容を組み込み、特に気候変動対策に関する教育については義務化していく方向性を示しました。卒業生が SDGs に関する自身の考えを持って社会に貢献し、将来のチェンジメーカーとしての役割を果たすことに期待しているとも話しました。

第 2 部の参加大学によるグループ討論では、「サステナブルキャンパスに向けた取組みと課題」というテーマで、議論が展開されました。

1. サステナブルキャンパスの取組みは SDGs が始まる前から実施されており、2015 年以降に組織的に取り組むようになった大学では、大学 1 年生のカリキュラムに SDGs に関係する講義を必修とした経緯が説明されました。
2. サステナブル推進本部に学生を雇用している事例では、学生が高い志を持つ学生がいる一方、教員の巻き込みが困難であることが共有されました。解決策として、全学的な取組みに広げていくための仕組み作りが必要であるという意見が挙がりました。学内における SDGs 促進のためのマンパワーが不足していると同時に、特に教育と研究の両面で多忙な教員の動機付けの難しさが示されました。
3. SDGs に興味のある学生の参画をどのように効果的に計画実施できるかも論点の一つであるのと指摘がありました。学部横断型の取組みを広める上での運用面の難しさも議論に上り、これからの取組みに関する各大学からの意見が共有されました。

総括として村田俊一関西学院大学教授 (SDG-UP アドバイザー) が、直近 2 年間の学生の意識の変化について取り上げました。志の高い学生が増加し、ボトムアップで良いアイデアを積極的に出している事例や、学部横断的なカリキュラムを編成しようとする動きが顕著であることを紹介しました。また、SDG-UP 発足当初と比較すると、参加大学が進化遂げているとも話しました。ゴッダールシニアディレクターの経験に基づ

き、教員と学生をより効果的に繋げるリソースパーソンの重要性、また日本においても大学における同様の人材のトレーニングとそれをサポートするための環境作りの重要性を強調しました。また、ゴッダールシニアディレクターの「チェンジメーカーの役割を備えた卒業生を社会に送り出したい」というメッセージについても触れました。その上で、チェンジメーカーを育てる責任のある我々教員自身もチェンジエージェントでなければならないことから、教員開発（ファカルティ・ディベロップメント）と同時にさらなる意識改革が必要であること取り上げました。今後、SDGsの達成を目指す上では、物質主義に偏らず、社会全体でバランスの取れた成長を促していくためのガバナンスやリーダーシップ、様々な環境でリーダーとして貢献できる人材育成の重要性を強調し、ワークショップを締めくくりました。

参加大学 21校（アルファベット順）

愛媛大学

千葉商科大学

広島大学

北海道大学

神奈川大学

国際大学

慶應義塾大学

関西学院大学

ノートルダム清心女子大学

岡山大学

沖縄科学技術大学院大学

大阪医科薬科大学

龍谷大学

上智大学

昭和音楽大学

創価大学

北九州市立大学

東京外国語大学

東京工業大学

東京都市大学

東洋大学